



元鑑識課写真係は 日本海の芸術写真を撮り続ける。

昭和27(1952)年、鳥取市街地のほとんどを焼き尽くした「鳥取大火」が発生した。農家生まれの山本浩一さんが警察の仕事に就いたのはその直後だった。

「大火で鑑識課の資料が大量に焼失しました。臨時職員としてその復元の仕事を勧められたのははじまりです」

過酷な業務を果たしたあと、正式職員の試験を受けて採用。そして引き続き鑑識課の写真係を拝命する。無残な現場をも冷静沈着な目で映像に刻む。ここですでに写真というものの本質と深く向き合っていたにちがいないが、運命はある人との貴重な出会いを用意していた。山陰の自然を撮り続け、日本の芸術写真の草分け的存在である、鳥取県が生んだ巨匠・塩谷定好しおたていこう氏だ。

「ぼつりぼつりと話される先生から……」抱えきれないほどの薫陶を受け、本格的に写真の世界に踏みこんでいった。

日本海を撮った。撮り続けた。「どの季節もいいが、やはり怒り狂った冬の海がいちばん」。長時間ひとり海に向き合っていて、「あの人、身を投げようとしているのでは……」と心配されたこともある。

鳥取県展で入選すること数知れぬ実力派。現在は、後進の指導者的な立場でも活躍している。温厚な名指導者は、むしろ現役の作家であり続ける。「歳を取って人恋しくなったせいか、このごろはよく人物写真を撮っています」。映像に写るのは、人の温もりだろう。

写真家
山本浩一



ゆ
う
ゆ
う、

ゆ
り

は
ま